

天空のコスモロジー

——古代日本文学に見る宇宙観との比較

大 飼 公 之

これは宮城学院女子大学キリスト教文化研究所のシンポジウム「天空のコスモロジー——琉球・八重山諸島から見る宇宙」(二〇一六年二月一七日「土」 於宮城学院女子大学第二会議室)における山里純一氏と宮城幸子氏の講演を踏まえた当日のコメントに、その折、用意していた資料を加えてまとめたものである。

1

山里先生の「沖縄の民間文芸に見る星・月・風」と宮城先生の「八重山の暮らしと伝承 星・月・風」という講演をうかがい、沖縄の人々の生活に密着した伝承、特に星と月と風にかかわる詳細なありようを知ることができました。また、三線と唄による紹介も感動いたしました。

私は三線どころか唄もうたえませんから、今日のシンポジウムのテーマを「天空のコスモロジー」と設定した一人として、私なりの問題意識を述べてお許しいただきたいと思います。

まず、日本人がうけとめた宇宙観(コスモロジー)の基本的なありようを『古事記』の神話をよりどころにとらえたいと思います。「黄泉国神話」。みなさん、ご存じのとおり、イザナキ

の神が、死んだ(神去った)イザナミの神を追って黄泉国を訪ねる話です。

詳しく紹介しているいとまはありませんが、この話はイザナキ(生者)が黄泉国でイザナミ(死者)と出会い、次いでイザナミの屍の醜状(死の実態)を目にして逃げ出し、最後に「千引の石」を黄泉国の境に引き塞ぐというふうに展開します。

つまりこれは往還可能であった「生の領域」と「死の領域」が確然と分かれたる物語であり、生と死の連続する意識に終止符がうたれたことの起源譚であるといえましょう。

とり上げたいのはその後です。イザナキは黄泉国の穢れをすすごうと日向の阿波岐原で禊ぎ祓いをします(紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到り坐して、禊ぎ祓へたまひき)。その折、身につけていた杖や帯などを投げ捨てた際にさまざまな神が生成します。

そしてその最後にアマテラスとツクヨミとスサノヲの三貴子が生成する。イザナキが左の目を洗うとアマテラスが、右の目を洗うとツクヨミが、そして鼻を洗うとスサノヲが生成したと。

是に左の御目を洗ひたまふ時、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時、成れる神の名は月読命。次に御鼻を洗ひたまふ時、成れる神の名は、建速須佐之男命。

この話はさらに次のように続きます。イザナキはたいへん喜び「私は多くの子を生み続けて、とうとう三はしらのりっぱな

子をさずかった」といい、アマテラスにはタカマノハラ（高天の原）を、ツクヨミにはヨルノラスクニ（夜之食国）を、スサノヲにはウナハラ（海原）を分治するよう委任したというのです。

此の時、伊耶那伎命いざなきのみこと大く歡喜よろこびて詔のりたまはく、「吾は子を生み生みて、生みの終はてに三の貴き子を得つ」とのりたまひて、即ち御頸珠みくびたまの玉の緒をもゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝命は高天原を知らせ」と事依ことよさして賜ひき。故、其の御頸珠の名を御倉板拳みくらたなの神と謂いふ。次に月読命に詔りたまはく、「汝命は夜之食国を知らせ」と事依ことよさしき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、「汝命は海原を知らせ」と言依ことよさしき。

ここにはタカマノハラとヨルノラスクニとウナハラの三つの領域がとり上げられています。タカマノハラは崇高な天上の原のことでありましょうから、これは「地の領域」に対する「天の領域」。ヨルノラスクニは「昼の領域」に対する「夜の領域」つまり夜を支配する領域をいい、ウナハラは文字どおり「海の領域」をいうのでしょう。

この神話からするとその三つの領域を含む全体が古代日本人のうけとめていた宇宙であったといえましょう。

もっともウナハラは「天」（天の領域）に対する「海」（海の領域）をいうとみられますが、「天の領域」に対する「地の領域」の、さらにそれを陸地と海域に分けて、その海域を特にそうとらえているともみられます。

そのそれぞれの領域をアマテラス（高天原を知らせ）とツクヨミ（夜之食国を知らせ）とスサノヲ（海原を知らせ）が分治するということです。

そのように「天の領域」「夜の領域」「海の領域」は神々の支配する領域となつたというのでありますが、そこには「昼の領域」「地の領域」（ことに陸地）が人間の生きる領域にほかならないとする認識が踏まえられているといえましょう。

ちなみに『日本書紀』にはこの類話が四種収められています（正文、一書第一、第六、第十二）。その一つ『日本書紀』正文はイザナキとイザナミが「天下あめのしたの主者きみたるものを生まざらん」として「日の神」（アマテラス）と「月の神」（ツクヨミ）と、ヒルコとスサノヲを生んだとあります。

そして「天下の主者」にふさわしい神としてアマテラスが、次いでツクヨミが「天上あめの事こと」にあたることになります。一方、ヒルコはイハクスフネ（磐櫂船）に載せて放ち棄てられ、スサノヲは「宇宙あめのした」に君臨すべき神ではないとしてネノクニ（根国）に追いやられたと語られます。

これはまさしく「天下の主者」をアマテラスとすることをメインとし、それに次ぐ神としてツクヨミが語られています。そしてここに語られる「宇宙」は「天の領域」と「地の領域」（天下）に限定的であるといえましょう。だから「宇宙に君臨あめのしたたる」べからざるスサノヲはその領域外の「遠く根国」に追放されることになる。

一方『古事記』の「宇宙」はすでに言ったように「天の領域」と「地の領域」、「昼の領域」と「夜の領域」さらに「海の領域」の全体を含んでいます。そしてアマテラスとツクヨミとスサノヲがそれぞれの領域を分治するということです。

そこに『日本書紀』（正文）との違いがあります。一言でいうと『古事記』は「天下の王者」を語るといっても「宇宙」の分治を語ることに主題があるといえましょう。

しかし『古事記』のこの神話もはじめからこのようにまとめられていたか否か。ここにも長い生成の歴史があったのではないのでしょうか。その痕跡の一つが「領域」に対する認識の輻輳（かくそう）に認められるかと思っています。

ここには「高天原」といい「海原」というように領域を「原」ととらえる認識がみられます。その一方「夜之食国」というように「国」ととらえてもいます。つまり「原」とする認識と「国」とする認識が輻輳しているのです。

想像をめぐらすと、かつて「原」とする認識において「天」（タカマノハラ）と「海」（ウナハラ）を宇宙とし、その二つの領域をアマテラスとスサノヲが分治するというふうな神話があったのではないのでしょうか。そこにツクヨミが加えられることになったのかもしれませんが。

さて、古代日本人の宇宙観はさまざまな広がりを持っていますし、また、輻輳してもいます。さきの黄泉国神話が語る「生の領域」と「死の領域」（ヨモツクニ）も、『日本書紀』（正文）がスサノヲを追放したというネノクニ（根国）も、人々のうけ

とめていた宇宙にはかなりません。『古事記』はネノクニをネノカタスクニ（根之堅州国）といい、ハハノクニ（妣の国）とも語っています。

しかし、タカマノハラとヨルノラスクニとウナハラが古代日本人のうけとめた宇宙観を表示していることは明らかです。それはわれわれが持ちあわせる宇宙観の基本にもあり続けているかと思っています。

私は「天空のコスモロジー」というテーマの基本にこの宇宙観を踏まえたいと思います。そしてそれがアマテラスとツクヨミとスサノヲによって分治されたことを重視したいと思っています。

アマテラスとツクヨミとスサノヲは太陽と月と風の属性を持つ神でありますから、古代日本人は太陽と月と風がこの宇宙を支配しているのとらえていたといえましょう。それはわれわれの意識の奥処（おくか）にもあり続けているのではないのでしょうか。

その太陽と月と風をめぐって、古代日本と沖縄の人々がとらえたありようを探りたいと思います。

2

アマテラスが太陽の神であることは神名からもうかがうことができます。それはさきの『日本書紀』（正文）が「日の神」を生んだと語り、その神をオホヒルメノムチ（大日靈貴）とよぶといい、一書ではアマテラス（天照大神）とあり、また、アマテラスオホヒルメノムチ（天照大日靈貴）ともあると記し

ていることに明らかです。

ツクヨミが月の神であることもその名称から推測できましよう。古代和歌には月のことをツクヨミとうたう例もみられます。それはまた、書紀の正文が「日の神」に次いで「月の神」を生んだといい、その神は一書にツクユミ（月弓尊）、ツクヨミ（月夜見尊、月読尊）というと記していることに明らかです。書紀の正文はイザナキとイザナミが「日の神」（アマテラス）について「此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る」と言い、また「未だ若此靈に異しき児」はいなかったと言い、「天上の事」つまりタカマノハラを支配させたと語っています。そして「月の神」については「其の光彩しきこと、日に垂げり、以て日に配べて治すべし」といい、これまた、天に送ったと言っています。

アマテラスとツクヨミは書紀の正文が明示するとおり「日の神」であり「月の神」であり、その神格は太陽（日）と月の属性を踏まえて造形されたといえましよう。

スサノヲについては「日の神」とか「月の神」というふうにしてその神格を明示した記事はありません。また、この神が輻輳した属性を持ちあわせていることも知られているとおりです。

日本古典文学全集『古事記』はスサノヲについて「出雲の英雄神で、暴風・農耕・植林・冶金などの神としての属性をもつ」といい「鼻から化生したのは、鼻は息（風）を出す器官であり、この神の属性の一つが暴風神であるためと解される」といっています（頭注）。

そのとおりで、スサノヲの属性は輻輳していますが、「風の神」としての神格を基本にそなえていることは疑いありません。「すさぶ」ということばとの対応からもそのようにみることでできましよう。

そこでこの太陽（日）と月と風をめぐる、沖繩（琉球）におけるありようを探ってみましよう。特にその類似性と異質性に目を向けたいと思います。

まず、太陽が神聖視され、それを王権に結びつけてとらえる発想は古代日本や沖繩（琉球）に限りません。むしろユニバーサルな発想ととらえられます。

すでに知られているとおり、沖繩（琉球）において太陽（テダ・テイダ）は、ニルヤ（ニライ）の支配者として位置づけられ、王は太陽のセヂ（霊力）を与えられ、現世の支配者となるととらえられていました。

そのありようは古代日本と類似しています。天孫降臨神話がそれで、アマテラス（天照大御神）の嫡流が太陽の神性になり、まさしく日嗣の御子として天皇位を継ぐというのです。

また、万葉歌や「おもろ」（琉球の古代歌謡）にもみられるとおり、太陽と王権のかかわりは王都の構造にもおよんでいます。その中心をなす王宮は陽光のさす南（逆にその背面の北）を意識して作られていたとみられます（拙論「太陽（テダ）の宇宙」）。

そのように古代日本と沖繩における太陽と王権のかかわりは類似していますが、そこにはなお確認しなければならない問題

も残っています。

その一つは沖繩において太陽はニルヤ（ニライ）の支配者としてとらえられているのですが、そもそもそのニルヤ（ニライ）なる領域がいかにとらえられ、どこに設定されていたかが問題です。海上の彼方なのか、天上なのか、地下なのか。そうしたことがはっきりしないままでは沖繩における太陽と王権のありようは明確になりませんし、古代日本との比較も不十分になります。

次に視点をかえて太陽の運行にかかわってみておきましょう。一つは方位とのかかわりです。日本語において東西は「ひがし」（ひむかし）「にし」というふうに言っています。それに対して沖繩で東はアガリ・アガルイ、西はイリ。沖繩では日の出、日の入りが、東西を意味しているといえましょう。

その「ひがし」（ひむかし）「にし」の「し」は風を意味するとみられています。つまり東風、西風が東方、西方を意味していたといえましょう。もちろん「ひがし」「ひむかし」という「ひ」が太陽（日）を意味することは疑いありませんが、古代日本において方位は基本的に風位でもあったのです。

もっとも古代日本では東を「ひのたて」（日の経・縦）、西を「ひのよこ」（日の緯・横）と言ってもいます。「ひのたて」は日の発つ方、「ひのよこ」は日の傾く方を意味するとみられますから、これは沖繩と等しく太陽の運行に沿って方位が規定されているといえましょう。

ところが「ひのたて」「ひのよこ」という言い方は後々ほと

んど使われませんから、太陽軸を基本として規定する方位は沖繩に特徴的であるといえましょう。それだけ沖繩において太陽は重く意識され続けているのかもしれませんが。

もう一つ。沖繩において太陽は東の穴から登場し、西の穴に沈んでいくととらえられていました。「おもろ」にみられる「てだの穴」がそれです。

その発想は沖繩を越えて広がりを持っています。文献的には古代中国にもっとも古くみられ、ポリネシアからミクロネシアにまでおよんでいます（先掲「太陽（テダ）の宇宙」。この太陽の穴という発想は潜在的にはともかく、古代日本にみられません。そこに沖繩との違いが認められましょう。

時間がおしてきました。さきを急いで月に目を向けましょう。沖繩の月については山里先生と宮城先生から詳しい報告がありましたので、私は古代日本とかかわるありようについて言い加えるに留めたいと思います。

もとより古代日本においても沖繩においても人々は月の運行によって年月をはかっています。そしてその満ち欠けをくり返すありように「生」と「死」の循環し続けるイメージや、生命の復活あるいは永遠の生命といったイメージをうけとめています。

また、その変化する月のかたちにさまざまなイメージをとらえてもいます。たとえば満月の輪郭はどこも欠けていません。そのありようから人々は満月に充足したイメージをうけとめ、

すべてがととのった女性の美を形容したりします。

あるいは三日月（初月、若月、新月）に美人の眉をイメージしています。それは中国の蛾眉、眉月といった発想をうけとめていたのでありましょう。

山里先生と宮城先生の報告を聞きながら、そうした発想が古代日本と沖繩にまたがってあることを確信しました。ただもう一つ、沖繩において月が夜の太陽としてとらえられたことについて触れておきたいと思っています。

宮古島のタービのニーフチグイ（根口声）をみてみましょう。タービとは呪禱^{じゅとう}的歌謡のことです。

それは「天道のおかげで 恐れ多い神のおかげで」（ていんだうぬ みゆぶぎ やぐみよーぬ みゆぶぎ）とはじまり、

あさていだぬ みゆぶぎ 父太陽のおかげで

うやていだぬ みゆぶぎ 親太陽のおかげで

ゆーチキぬ みやぶぎ 夜の月のおかげで

ゆーていだぬ みやぶぎ 夜の太陽のおかげで

とうたわれ、その後「根立て主の私は」（にだりぬシ わんな）以下長い詞章が続きます。

これは呪禱的歌謡の冒頭にしばしばくり返される詞章です。そうした詞章の冒頭で人々を守護する尊い神の名を唱えあげるのです。

その「天道」の神としてここでは、まず太陽がうたわれます。そして次に月があげられています。そのことに注意したいと思います。太陽と月は等しく「天の領域」を支配する神と

らえられていたのでしょう。

その太陽は父とも親とも称されています（あさていだぬ みゆぶぎ うやていだぬ みゆぶぎ）。何よりも尊い神と位置づけられているのでしょう。また、月に対してはくり返し「夜の」（ユー）と形容されています（ゆーチキぬ、ゆーていだぬ）。月は「夜の領域」を支配する神ととらえられているといえましよう。まず「昼の領域」を支配する太陽が、次いで「夜の領域」を支配する月がうたわれるのです。

これはさきに触れた『古事記』や『日本書紀』（正文）の語る「日の神」とそれを次ぐ「月の神」のありように類似しています。その発想はほとんど等しいといえましよう。

しかし、古代日本において月を「夜の太陽」とする表現はみられません。ちなみに沖繩では星についても太陽（ていだ）の子ととらえることもあります。いわば沖繩においては太陽も月も星も「ていだ」ととらえた、あるいはとらえ得たといえましよう。

外間守善氏は「ていだ」の語源が「照ら」（照る）にあるといっています（『沖繩の言葉と歴史』）。とすると「ていだ」は太陽そのものをいうに違いありませんが、それは「照る」というはたらきを重視した名詞であったことになりましよう。そして「照ること」において太陽のみならず月や星も「ていだ」ととらえ得たということなのではないでしょうか。

「照ること」を重視することは古代日本にも認められます。ほかならぬアマテラスのテラスもそれであります。しかし、古

代日本においてそれを月や星に及ぼすことはなかったと思われる。そこに違いを見ることができましよう。

沖縄の風についても山里先生と宮城先生から詳しい報告がありましたので、私は風が太陽（日）や月とともに宇宙を構成する要素として重視されたことおよび古代日本と沖縄の風にかかわるイメージは中国を踏まえた広汎な地域においてうけとめられていることについてだけ触れておきたいと思います。

風が宇宙を構成する要素であることは中国（特に古代中国）を視野におくときわめてわかりやすいと思われます。たとえばわれわれは自然界の景色や状態を「風土」「風物」「風光」「風月」「風情」「風氣」「風色」などと表現します。すべて風をもって表現するのです。この一事をもつても風が宇宙を構成する要素としてうけとられていることは明らかでしょう。もちろんそれはいずれも漢語です。

風そのものは目にすることができません。にもかかわらず風は農耕のみならず、人々の生活に重大な影響を与えます。人々はその風にいのちの力を感じとっていました。

「風化」ということばはそれを如実に示しています。これまた、もとより漢語ですが、風化するとはいのちをはぐくむことを意味するとともに、いのちを奪う力を意味しています。それは古代中国に溯って認められる発想であります。古代日本や沖縄にも認められるのです（拙論「風の宇宙―琉球文学の地平」

『沖縄研究ノート』13）。

また「風」という文字は神聖な鳥（鳳）のかたちを表わしているといわれています。それに似て風と鳥を結びつける発想も古代中国のみならず、万葉歌や「おもしろ」にも読みとることができます。

もう一つ。山里先生がさきのお話で触れておられますように「おもしろ」には太陽の穴に似て「真東風穴」（マコチアナ）「真南風穴」（マハヘアナ）というふうに風の穴がうたわれています。風の穴はニルヤ（ニライ）に結びつく聖なる穴でもあるのですが、それが日本各地に知られる風穴の発想と等しいか否か、これから十分に検討したいと思います。

3

山里先生と宮城先生は沖縄の、特に八重山諸島における星の伝承についても詳しくお話くださいました。私は沖縄の人々が星にかかわる伝承文芸を多様に持ちあわせていることに驚きました。そしてこれほど豊かな星のイメージを抱えていることに惹かれました。それは古代日本のありようとかかなり異なっています。

古代日本において星が語られたり、うたわれたりすることはあまりありません。というよりも、うたわれ、語られる星はきわめて限定的です。また「負」のイメージに結びついたりもしています。

たとえば神話についていうと『日本書紀』（神代紀）に「星の神」カカセヲ（香香背男）が登場しますが、星にかかわる神

話はほとんどこれだけではないでしょうか。

しかもカカセヲは服従しない鬼神（順はぬ鬼神、不^{うへ}服はぬ者）であり（神代下・正文）、また「天に悪しき神有り。名を天津甕星と曰ふ。亦の名は天香香背男」（同一書・第二）というふう^{あまつみかほし}に語られています。悪神であつたというのです。まさに「負」のイメージを負う神なのです。

また『日本書紀』にはしばしば彗星（はきはほし、ながきほし）つまり流れ星の出現が記されています。これは中国の占星の思想にもとづいて不吉、禍事の前兆をいうのです。

古代和歌に目を向けると万葉歌には星にかかわる歌が少なくありません。しかし、そのほとんどは七夕歌です。もとよりこれは中国の七夕（乞巧奠）の影響をうけたものです。ところが七夕歌を除くと、星の歌はきわめて少ない。たとえば、

天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎかくる見ゆ^{あめ}

（710六八）

天上の海に雲の波が立ち、月の舟が星の林に漕ぎ隠れていくのがみえる。

とうたわれています。これも中国文学の影響が色濃くみられますが、この「星の林」とは天に群れる星をいうのであり、具体的な星をうたっているわけではありません。また、

北山にたなびく雲の青雲の星離れゆき月を離れて

（212六）

北山にたなびいている雲は、青雲のなかの星からも離

れ、月からも離れ去って行ってしまった。

とうたう歌もあります。挽歌です。これも具体的な星がうたわれているというわけではありません。

具体的な星をうたうことがないのでありません。

「あか星の 明くる朝は」（590四）などとみられます。「あか星」は明けの明星つまり金星のことです。

また「夕星」という表現もあります。これは「夕星の 行きかく行き」（219六）「夕星の 夕になれば」（590四）「夕星も通ふ天道を」（1020一〇）などとみられます。それは宵の明星。これまた、金星です。

万葉歌において具体的にうたわれる星はその程度で、きわめて限定的です。その傾向は『古今集』以降においてもさして違いはありません。古代日本人は具体的な星を対象としてイメージをふくらませることに乏しかったといえましょう。

もちろん奈良時代人もそれなりに星の知識を持っていたことは明らかです。たとえば一九七二年に発見されて大きな話題となった高松塚古墳の天井壁には星宿図が描かれています。また、天武天皇四年（六七五年）に日本ではじめて占星台が立てられています。

にもかかわらず、具体的な星に対するイメージはあまりにも乏しいといえましょう。ちなみに平安時代の『枕草子』は自然に対して豊かな感性を持ちあわせることで知られています。そこに清少納言は風（「風は」一八五段）日（「日は」二二七段）月（「月は」二二八段）雲（「雲は」二三〇段）とともに

に星をとりあげています（「星は」二二九段）。

星は、すばる。彦星。みやう星。夕づつ。よばひ星をだになからましかば、まして。

星は昴がいい。彦星。明けの明星。宵の明星。よばひ星は尾さえなかつたら、いつそうすばらしいのに。

清少納言が星に関心をよせ、その美をうけとめていたことは明らかです。しかし、とりあげられている星は「すばる」（昴）にせよ、「彦星」にせよ、「みやう星」「夕づつ」（つまり金星）にせよあるいは「よばひ星」（彗星・流れ星・ほうきぼし）にしても、奈良時代人がとりあげた星の範囲を越えていません。

『枕草子』にしてそうなのです。古代日本人にとって具体的な星についてはほとんど関心の的になっていない、ないしはきわめて限定的でしかなかったと思われまふ。それに対して沖繩の人々は星に強い関心をもっていた。

もちろん山里先生や宮城先生が示してくださった事例は民間をベースに今も語られている伝承であつて、そのまま古代日本と比較するわけにもいきません。しかし、このきわだった違いをどのようにとらえたらいいのか。それは時代的な変遷なのか、地域的な違いなのか。そうした人々の意識の違いは「天空のコスモロジー」をとらえる上で無視できないと思います。

「天空のコスモロジー」にかかわる問題は尽きません。私は思いつくままに古代日本人がうけとめた宇宙観をとらえ、太陽（日）と月と風をとりあげてみました。そして星について沖繩

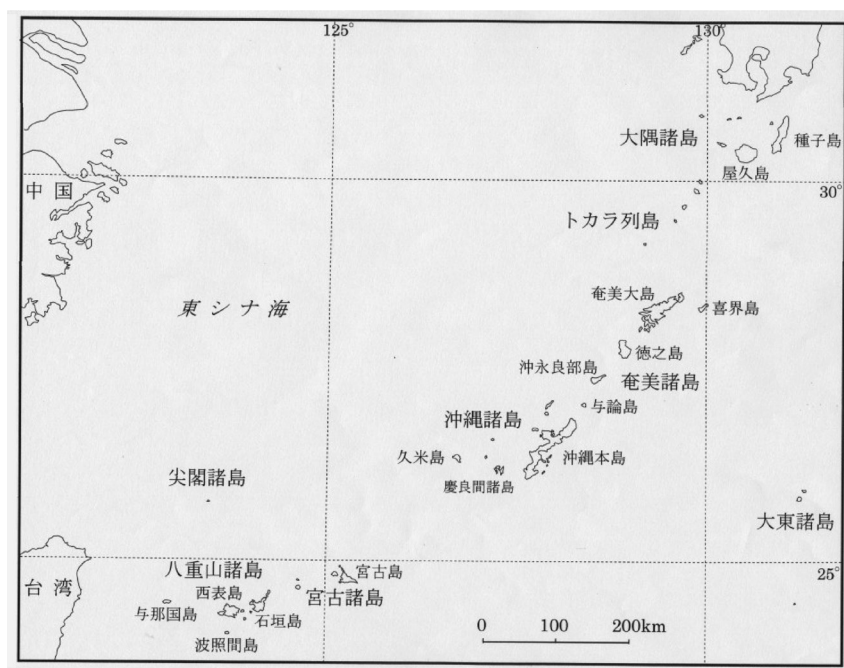
の人々の意識との違いに触れてみました。

そうした問題意識がこれからの討論のなかに加えられ、深めることができる幸いです。（以上）

沖縄の民間文芸にみる星・月・風

山里純一

地理的呼称

琉球列島（奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島）＝琉球弧・南島
琉球諸島（沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島）＝現在の沖縄県

Ⅰ 沖縄の星の民話

【例話Ⅰ】「ニースファブシ（北極星）の由来」（竹原孫恭「ばがー島・八重山の民話」）

昔、八重山のある村に、二人の兄弟が住んでいました。父親は亡くなり、母親一人で、二人の兄弟を育てていました。兄はなまけ者で、ブラブラ遊んで日を送っていました。弟はまじめで一生懸命に働き、苦労してきた母親を大切にしながら暮らしていました。ところがある日、母親が重い病気にかかってしまいました。弟は、母親の側を片時も離れず、心を込めて看病しました。

一方、兄といえば、母親のことも忘れ遊びほうけていました。弟の看病もむなし、母親の病気はいよいよ重くなり、とうとう亡くなってしまいました。泣く泣く野辺送りをするしましたが、弟の悲しみはつるばかりでした。

こうしたある日、みずばらしい身なりのおばあさんが現れ、

「あなたは、どうしてそんなに悲しんでいるのですか」と弟に尋ねました。弟は、

「実は、大事なお母さんを亡くしてしまい、お母さんに会うことができないのが悲しいのです」と答えました。するとおばあさんは、

「それは何ともお気の毒ですね。人はいつかは死んでいくのはならないのです。でも、あなたは、そんなにお母さんに会いたいのですか」と言うので、

「はい、ぜひ、もう一度、お母さんに会いたいです」と言いました。するとおばあさんは、

「わかりました。それ程までに会いたいのなら、私があわせてあげましょう。お兄さんと一緒に来て下さい」と言って、二人を大きな川の側まで連れて行きました。

そこには一艘の小さな舟があって、二人の兄弟はその舟に乗り込みました。

「一生懸命に漕ぐのですよ。向こう岸に着けばお母さんに会えますよ」と。

二人はおばあさんに言われた通りに、力の限り漕ぎ続けました。ところが川幅が広く、漕げども漕げども、向こう岸には着けませんでした。ところが川幅が広く、

すつかりへたばってしまった兄は、とうとう、

「もうだめだ、いくら漕いでも、向こう岸には着かないよ。俺たちはだまされたんだよ」と權を投げ出し、舟の中で寝転んでしまいました。

しかし、弟はあきらめません。母親に会いたい一心で舟を漕ぎ続けました。しばらく行くと、川の流れが急に速くなり、小舟はみるみるうちに流され、ゴゴツというものすごい音とともに流に吞み込まれてしまいました。

「あー、もう駄目だ。お母さん助けてー」と弟が叫んだ時、あのおばあさんが現れ、弟をさつとすくい上げると、天に昇っていききました。

「あっ、おばあさん」

「そうです。私は実は女神です。約束通り、あなたのお母さんに会わせてあげましょう」と言いつつ、弟は、なつかしい母親に会うことができました。そして、

「あなたは親孝行だから、これからは世の中の人々の模範として、皆の目標となさい」と言いつつ、弟を北の空に耀く子の方星（北極星）にしました。

一方、兄の方は、

「あなたはもう少し苦労しておきなさい」と、川の中に残されてしまいました。

今でも天の川の中に、多くの星から離れて一つだけさびしく光っている星があります。それはいまなお舟を漕ぎ続ける兄の星だということです。

石垣市白保 米盛 雄（明治四四生まれ）

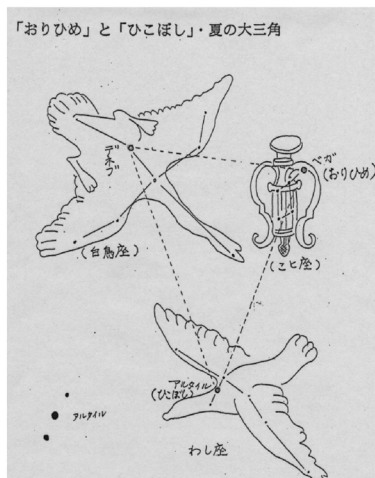
▼アイヌの伝説「働き星・なまけ星」（野尻抱影『旅と伝説』借成社文庫、末岡外美夫『人間達のみた星座と伝承』）

- ・ 貧しい母親と二人の息子が住んでいたが、母親は重い病氣にかかって死ぬ。
- ・ 兄弟は母親を戻してくれるように天の神様に祈ると、みずばらしい姿のおばあさんが現れて、「私を舟に乗せて川向こうまで渡してくれたら、お母さんに合わせてあげる」と言つたので、喜んで舟を漕ぎ出す。
- ・ いくら漕いでも舟は向こう岸に着かないので、兄は怒って櫂を放り投げて寝てしまうが、弟は母親に会いたい一心で舟を漕ぎ続ける。
- ・ この様子を見ていたおばあさんは女神の姿になって、弟を抱いて天に登っていく。
- ・ びつくりした兄は飛び起きて自分も連れて行つてと叫ぶが、舟はどんどん流されて地獄へ落ちて行く。
- ・ これがヒコボシとそれを挟む二つの星である。

※この「ニヌフアプシの由来」は奄美・沖縄諸島では他に聴取例はない。アイヌの民話とよく似ているのは偶然の一致か？。しかし語りの終末が相違する。

○アイヌの民話↓おばあさん（女神）は、わし座（ヒコボシ）のα（二等星のアルイタイル）、その東の暗い四等星のγ星は忘けるのお兄さん、西側のそれより明るい三等星のβ星は働き者の弟であるとする。ちなみにこれらの三星をアイヌではウナルベクサノチウ（老婆を舟で渡す星の意味）と呼んでいるという。

○八重山の民話↓親孝行の弟は北極星に、なまけ者の兄は「はくちよう座」の一等星デネブにあて着く。



【例話2】「北斗七星の由来」 ↓「星女房」(「大浜の民話1」)

昔、あるところに貧しい親子が住んでいました。子供が三歳の時、両親が死んだため、その子供は隣の家の下男となり、朝晩、馬の草刈りを仕事としてあてがわれ、苦勞しながら成長していきました。大人になったある日のこと、草刈りに行った男が松の下で寂しそうな顔をして立っている、どこからともなく女が現れ、

「なぜ、こんなところに立っているのですか」と尋ねました。男は、

「私は三歳の時、両親と死に別れ、隣の家の下男になっていました。この松の下に来ると父と母のことを思いだし、立ち尽くしてしまうのです」と話したところ、その女は、

「偶然ですね。実は私もあなたと同じ境遇にあります。是非ともあなたの妻になりたいので、結婚してくれませんか」と言い、こうして二人は結婚することになりました。二人で精を出して働いた結果、粟倉や米倉なども造れる程裕福になり、また子供にも恵まれ、幸せな生活を送っていました。

ある日、夫は妻に、

「実は、親の葬式の際、隣の家から着物を借りたが、その返済もまだ済んでいない」と話しました。妻は、

「わかりました。私が何とかしますから心配しないで下さい」と言つて、夫を安心させました。

ある晩、夫が寝ていると、仕事部屋から数人の女の声とガサガサという物音が聞こえたので、翌朝、夫は妻に、

「昨夜は何をしていたのか」と聞くと、

「あなたが隣から借りてきた着物の返済をするために、姉妹を呼んで布を織っていたのよ。これを隣の家に持って行つて下さい」と妻はにこにこして答えました。

「ありがとう。長い間、気になっていたが、お前のおかげで、隣の家への返済ができてホッとしたよ」と夫は妻にお礼を言いました。

しばらく経ったある日のこと。夫婦で夜空を眺めながら話をしていると、夫が、

「おや、七ツ星のうち一番上の星が消えているよ、ほら見てごらん。これは一体どういうことだろう」と、妻に声をかけました。すると妻は急に寂しそうな顔をして黙り込んでしまいました。そしてか細い声で、

「その星が実は私なのです。あなたがそういう話をしてしまったので、残念ですが、私はもう天に帰らなければなりません」と言いました。びつくりした夫は、余計なことを言ってしまったことを詫びて、行かないように説得しましたが、天の掟とあつてはどうにもなりません。妻は隠しておいた羽衣を取り出して、それを着ると子供を抱いて天に昇つて行つてしまいました。天に帰ると、

「私は、地上に降りて人間と結婚し、人間との間に子供までもうけた身なので、一番上で耀くことはできません」と言つて、二番目の位置に座ることになりました。その側に小さく見える星は、地上から連れていった子供だと言われています。

※北斗七星の柄の先から2番目の星を見ると、側に小さな星が伴っていることがわかる。その星をミザールという。

【例話3】「子供の寿命・米寿の由来」(『具志川市史』民俗編下「昔話」)

昔、あるところに母と娘がいました。早朝、カー(井)に行つて水汲みをするのが娘の日課になっていました。ある日、娘がカーに行くと、髭を生やし杖をついた老人が現れて、「もったいない子だね」とつぶやいたそうです。「もったいない。かわいそうな子だね。本当に」と、何度も立ち止まっては、ため息交じりに独り言を言っていたらしい。

水を汲んで家に帰つた娘は母親に、

「髭を生やし杖をついたおじいさんが私の顔を見て、『もったいない』『かわいそうだ』と何やらつぶやいていたよ。なんでかね」と話しました。母親にも意味がわかりません。「そうだったの。じやお母さんが、そのおじいさんに会つて、どういふことなのか聞いてみようね」と、母親は急いでカーのところへ行くと、それらしきおじいさんが立っていました。

「あなた様が、私の娘に『もったいない子だね』とか『かわいそうな子だね』とおっしゃつた方ですか」と、母親が尋ねると、

「そうだよ」と。

「どういう意味で、そういうことをおっしゃつたのですか」と聞いたら、

「あなたの子は十八才の寿命しか与えられていないよ」とおっしゃつたので、びっくりして、

「私の娘は今年十八才ですよ。年が明けたら十九才になるので、今年までしか生きられないということでしょうか」

「残念ながらそういう運命になっているようだ」

「私の娘は徳があつてあなた様の目に留まつたと思ひますので、どうかあなた様のお力で、どうか私の娘の命を助けて下さい」と母親は泣きながらお願いしました。

「私は神の使いで下界に下りてきて、たまたまその娘に出会つただけで、私には助けることはできませんが、北の星の神と南の星の神が基を打つているところを教えますので、そこへ山猪の刺身を和え物にして持つて行つて、基に夢中になっている二人の神の間にそと置いておき、あなたは知らん振りして側においておきなさい」とおっしゃつたので、母親は教えられた通り、山猪の刺身の和え物を作つて、北の星神と南の星神が基をしているところへ行き、それを二人の神の間に置きました。二人の神は基に夢中になっているので、そのことに全く気づきません。打ち終えた後、目の前に山猪のさしみの和え物があつたので、お互い相手が持つてきたものだと思つて二人でおいしく食べた。食べ終わった後、一人の星の神が、

「これはお前のもてなしか」と言うと、

「俺ではない。お前のもてなしではないのか」

「いや、俺ではない」と、言い合つているところに母親が出て行き、

「これは私がお持ちしたものです」と申し上げました。

「お前は、どういうわけで、この山猪の刺身を持つてきたのか」と聞かれたので、

「はい。何月何日に、娘がいつものように朝早くカーに水汲みに行つたら、しかじかの風貌のお爺さんから『もったいない子』と言われたようなので、私がお会いしてお

話を伺つたら、十八才までしか生きられないことになっているとのこと。そこで二人の星の神様にお願いしてみようと言われて、このようにやってきました」と言つたら、「あなたが持つてきた山猪の刺身も食べてしまった以上、断るわけにもいかないね。それでは十八の十の上に八の字を書き足して、寿命を八十八才としてあげよう」と言われ、十八才で亡くなるはずだった娘は八十八才まで長生きできたということです。それで八十八才にはトーカチ(米寿)のお祝いを盛大にするようになったということだよ。

【参考】「北斗星と南斗星」(『搜神記』巻3)

菅輅が平原(山東省)を通りかかったとき、顔超という少年の人相を見て、若死にの相があらわれていると判断した。すると顔の父親が寿命をのばしてほしいとのんだので、輅は答えた。

「家に帰つて、清酒一樽と、鹿の乾肉一斤とを買つておきなさい。卯の日に、麦の刈りあとの南側の大きな桑の木の下で、二人の男が基を打っているはずだ。そこへ行つて酒をついでやり、乾肉を出しなさい。飲んでしまつたらまたついでやり、ぜんぶなくなるまで続けるのだ。もし何か尋ねたら、ただ頭を下げていればよい。口をきいてはいかんぞ。そうすれば、きっと誰かがお前を助けてくれるだろう」

顔が言われたとおりに行つてみると、果たして二人の男が基を打っている。顔は乾肉をさし出し、酒をついでやつた。二人は勝負に夢中になっていて、盃を口にはこび、乾肉をつまむばかりで、顔の方は見向きもしない。飲みほしてはまたついでやり、何度かくりかえしているうちに、北側に坐つていた男が、ふと顔がいるのに気づいて、叱りつけた。

「なぜここにいるんだ？」

顔が頭を下げてばかりいると、南側に坐っている男が口を出した。

「さつきからこの若者の酒を飲んでいたとあつては、返れなすむまいなあ」

すると北側の男は、

「しかし閻魔帳がもう決まつているんだ」

と言つたが、南側の男は、

「ちよつと閻魔帳を見せてごらん」

と、帳簿を手にとつて見ると、顔の寿命は十九歳までとなっている。男は筆をとつて上下顛倒のしるしをつけ、

「お前の寿命をのばして九十まで生きられるようにしてやつたぞ」と言った。顔は頭を下げ、家に帰つた。

あとで輅は、顔にこう説明した。

「君の力になれたなあ。まあ、寿命がのびてけつこうだ。じつは、北側に坐つていた男が北斗星で、南側に坐つていた男が南斗星だったのだ。南斗星は生をつかさどり、北斗星は死をつかさどるものだ。人間はすべて、母の胎内に宿つてからは、南斗星から北斗星の方へ進んで行くのだ。だからいっさいの願い事は、みな北斗星にお願いするのだ」

(竹田 晃 訳、『搜神記』、平凡社、二〇〇〇年)

北斗真君（北斗七星が神格化）…死をつかさどる
南斗真君（南斗六星が神格化）…生をつかさどる
神が現世に普通に下りて来ると考えられている。

※神祇の民話では、北斗七星を「ニヌファ星」、南斗六星をと「ウマヌファ星」とする。
「北の星」「南の星」が、それぞれ死と生を司る神であるという説明はなく、碁を打つ
二人の神に、十八才の寿命を八十八才まで引き延ばしてもらうことになっている。
↓米寿の由来



囲碁を打つ北斗七星と南斗六星



トーカー祝い床飾り（大浜）

Ⅱ 八重山古謡・節歌し「星」

〔資料1〕「むりか星ユンタ」（大浜の創作歌舞における）

一 (天帝) 南七つ星どうよう 天ぬアージ前から 島うたいでゆちやら 国うたいでゆちやら (南七つ星) 我や島うたゝるぬ くりや国うたゝるぬ (天帝)	「むりか星ユンタ」歌詞
(天帝) 南七つ星によ 天の神様が 島へ行けよと仰せられ 国へ帰れと云われたぞ (南七つ星) 私は島へ行かぬ 私は国へ行かぬ (天帝)	伊波南哲による標準語歌詞

んばでいずだる ゆやんど
ゆむでいずだる ちいにやんど
南ぬ方に ふんとうし
未ぬ方に うつちえんど

(南七つ星)

巻踊りいし うんさ
結踊りいし うんさ

二(天帝)

北七つ星どうよう
天ぬアージ前から
島うたいでゆちやら
国うたいでゆちやら

(北七つ星)

我や島うたゝるぬ
くりや国うたゝるぬ

(天帝)

んばでいずだる ゆやんど
ゆむでいずだる ちいにやんど
北ぬ方に ふんとうし
丑ぬ方に うつちえんど

(北七つ星)

巻踊りいし うんさ
結踊りいし うんさ

三(天帝)

ムリカ星星どうよう
天ぬアージ前から
島うたいでゆちやら
国うたいでゆちやら

(むりか星)

我や島ゆちやる
くりや国ゆちやる

(天帝)

うーふで受きだる ゆやんど
「うーふで受きだる ついにやんど」
島ぬ真上 通るんど
天ぬ中 通るんど
物作りい しうらば
ムリカ星 見当ていし

いやだと答えた そのために
だめだと答えた そのために
南の方に押し落とす
未の方へけりとばし

(南七つ星)

巻踊りしているそう
結踊りしているそう

(天帝)

北七つ星によ
天の神様が
島へ行けよと仰せられ
国へ帰れと云われたぞ

(北七つ星)

私は島へ行かぬ
私は国へ行かぬ

(天帝)

いやだと答えたそのために
だめだと答えたそのために
北の方に押し落とす
丑の方へけりとばし

(北七つ星)

巻踊りしているそう
結踊りしているそう

(天帝)

ムリカ星星によ
天の神様が
島へ行けと仰せられ
国へ帰れと云われたぞ

(むりか星)

神の仰せにしたがいて
私は国へ行きます

(天帝)

はいと答えたそのために
「八重山」島の真上から
「光輝き照りまきり」
物作り しうらば
ムリカ星を見当てにし
「スバル星を見当てにし」

「資料2」【ふな一星】（大浜）

- 一 フナー星ば 見当ていし
※（我が島どうヨ 島ぬ本ゆ
廻り星ば 見当ていしどう
麦作り 稔らし
麦ぬ稔り ザーラザーラし
粟作り 稔らし
粟ぬ稔り 黄金色
米作り 稔らし
米ぬ稔り スダマしじ
黍作り 稔らし
黍ぬ稔り 牛ぬ尾ぬぐとう
芋作り 実らし
芋ぬ実りや ピンティカンティ
フナー星を目標にして
我が島こそは島の本と言っている
廻り星を目標にして
麦を作つて稔らし
麦の实り様はザラザラという音
粟を作つて稔らし
粟の实り様は黄金色
米を作つて稔らし
米の实り様は数珠玉のようだ
黍を作つて稔らし
黍の实り様は牛の尾のようだ
芋を作つて稔らし
芋の实り様は突き出た格好

※ふな^{みぐ}ー星の対句として謡われる星

- ①「廻り星」(大浜の「ふな一星」)
- ②「むりか星」(新川の「ふな一星ユンタ」)
- ③「居ろル星」(大川の「ふな一星ユンタ」・登野城の「くな一星」)
- ④「群り星」(大川の「ふな一星ユンタ」)
- ⑤「むゆぬ星」(黒島の「うふな星」)

III 沖縄の月の民話

「例話1」「アールパンナー」梗概

で山に登つてお月様をお祈りするよに言う。そこで島の人々は満月の日に山に登つて祈願した。お月様は妙薬を与えるか月に取りに来るよに言う。しかし誰も受け取りにいけない人がない。そこにアルバンナーという、頭が雲につくような大男が現れたので、その人に頼むことにした。アルバンナーは雲雀と鴉を連れて出かける。月に着いたのが、アールバクンナーは門番に入場を断れ暴れたので、月の女神が来て術をかけ仁王立ちのまゝ動けなくした。それが月の中に見える影だとして、雲雀と鴉は月の女神から不老不死の薬をもらつて地球に戻つてきたが、途中、野母がいっぱい生えているところで遊んでいる隙に、ハブがやつてきてその薬をこぼしてしまふ。その時、不老不死の薬がハブの体にかかったため、ハブは脱皮して長生きできるようになつた。雲雀は怒つてハブを捕まえようとしたが、逆に足を踏まれたため曲がつきまう。鴉は逃げたらずハブに尻尾をつかれまたされたので尾が短いのだと。島の人はいくら待つても妙薬が届かなかつた。ちり饅頭も病氣もなくなくなつた。

「例話2」「十五夜の由来」「子供の寿命」梗概

月夜の晩、友達三人で遊びに行ったら、人の人の影に首がない。物知りのお婆さんに占ってもらったら、一番大事なものを射なければ命がないと言われ、女房を射ると、矢は隠れていた間男にあたる。それで十五夜には月を拝むようになった。

「例話3」 「月見の由来」 〈子供の寿命〉 梗概

その子供は驚いて母親に話すと、母親はその爺さんを追いかけて、「どうすれば子供は長子供が道を歩いているとお爺さんから「お前は十八歳まじか命がない」と言われる。その子供は驚いて母親に話すと、母親はその爺さんを追いかけて、「どうすれば子供は長生きできるのか」と聞くと、「十八歳の誕生日が経った後の八月十五日に、赤飯を作り、どこで月拜みをしなさい。ただし女の人はついて行ていけない」と言ったので、教えられた場所にて父と子が行った。そこに立派なお方がいて、その方にこれまでのいきさつを話すと、十八の上へ八をつけて、「八十八歳まで生きなさい」と言われた。

「例話4」 「継子と二十日月」 梗概

自分の子供には早めに夕ご飯を食へさせて寝かせるが、継子には「二十日月が上がらないと夕飯はあげない」と言つて、夜遅くに夕ご飯を食へさせた。

「例話5」 「屋慶名アカーと十日月」 梗概

首里の竜潭池を掘るために各村から人夫出したが、勝連と那城の屋慶名アカーは、「私たちは月の上がるまで仕事をさせて下さい」と言ったら、役人は「それでよい」と言つてて、私を働かせた。ところが月は昼間の三時頃上がつたらしい。それでさつさと切り上げて帰つた。

IV 八重山古謡・節歌と「月」

「資料1」 夜の子守歌（「月の美しや」）

- 一 月ぬ美しやみづなな 十日三日
女童美しや 十七つ
- 二 東から あーりおーる
大月ぬ夜おほづきぬよ
- 三 沖繩ん八重山ん
照らしようり
あんだぎなゝぬ
月ぬ夜
ばがけーら
遊びようら
- 月の美しいのは十三夜
乙女の美しいのは十七歳
東から上つてくる
大きなお月様
沖繩も 八重山も
照らし下さい
あれ程の
月夜だから
我々皆
遊びうよ

※日本本土の童謡【お月さんいくつ】

お月さんいくつ 十三七つ（じゅうさん ななつ）

そりやまだ若いな

あの子を産んで この子を産んで

誰に抱かしよ お方に抱かしよ

※江戸時代（元禄期）鳥取藩の童謡集（日本随筆大成『筆のかす』引用）

お月さまなんぼ、十三七つ、なゝおり着せて、京の町に出いたれば、竿落す

【資料2】「月ぬ真昼間節」

月ぬ真昼間や

ヤンサ潮ぬ 真千り

夜ぬ真夜中や

女童ぬ 潮時

※「まれちいユンタ」（竹富）

月昼間 なりくんや

太陽昼間 なりくんや

浜んかい ばがおーら

渚んかい ばがおーら

※「南ぬ浦南崎ユングトウ」（黒島）

むれ星間

大栗種 うとにん

丸栗種 蒔くにん

まさぼーり しきぼうり

しかはで まぶい

V 沖繩の風をめぐる表現

【風穴】

「真風穴」『おもしろさうし』巻十・五一

「真東風穴」『おもしろさうし』巻十・五三五

※風の吹いてくる源を穴に見立てた（日本思想大系『おもしろさうし』一八四頁注）

【風根】

「資料1」『おもしろさうし』第三「きこゑ大きみがなしおもしろ御さうし」の一節

風の根も 風り直ちへ

久米の島 押し合わち

荒の根も 直ちへ

金の島 引き合わちへ

※「風の根」は、「風の吹いてくる源」（日本思想大系『おもしろさうし』五二頁注）。

【資料2】「風が根アユー」（竹富島）（上勢頭亭『竹富島誌（歌謡・芸能篇）』）

風が根や

何どう根や

雲どうにぎーやる

上が根や

何どう根や

ぬりどうにぎーやる

【資料3】「とぐるだきデラバ」（与那国島）（『南島歌謡大成 IV 八重山篇』）

風が根や

上が根や

乗り雲と本

くぬ風に

くだ船に

いださば

根だいな

本だいな

やる風に

くだ風に

いださば

渡ぬ上にむたさば

（以下略）

【資料4】「まるま盆さん節」（喜舎場永珣『八重山民謡誌』）

まるま盆さん

ユナユナ見りば

風ぬ根を 知ち

居ちゆる 白鷺

（島の反対側に）坐っている白鷺よ

【資料5】新垣家文書「萬曆書」（伊平屋島）

「毎年冬至之日未明ニ風根を見て来年作毛并年中運を知る事」

※西表島西部の祖納湾に浮かぶ「まるま盆さん」をめぐらと

する白鷺は、風の根を知つていて、風が吹いてくる反対側

に群がっている、という光景を詩にしている。



まるま盆山（西表祖納）

◎風根＝風を生み出す根（本） ♪ 風が吹いてくる方向

旧曆二月から四月にかけて台湾付近で発生する低気圧。急に発達し、早い速度で沖縄近海を通過し北東へ移動するため、至る所で大きな被害をもたらす。

ザンザブロウ（山三郎）という大和の人が、中国から日本への帰途、台風に遭って西

表島の高那村に漂着したが、日本に帰らず、地元の女性を娶り永住した。ある年の三月三日、旋風ははじめ村の青年男女が恒例の潮干狩りに出かけたところ、北方の空にはなにか曇々旋風とともに豪雨となった。村では青年たちの安否を心配して大騒動になつたが、しばらくして風雨はおさまり、青年たちは全員無事島に戻つてきた。山三郎が嬉しさのあまり歌つたのがこの歌である。

※気候が急変した様子の箇所は、現在、次のように歌われている。

(一)は『八重山民謡誌』の歌詞

雨あめが降るとうし
(雨あめが降る時とき)

ヨーハンネ（ヨーアンネ）

さー北から

曇るヤイスリ（ヤーエスリ）

ゆみばするとうし（ゆばいする時）

あーかめ
くんがーやーり
うーかしたえ

きーじんきーざざ　きーざざ　ざんざぶろに　うざーざ

ざんざぶろうに
むーすかーすぬ
じんじんどー

サンサ
むーすかーすぬ
じんじんどー

今日ぬ ふくらしやや ハーリヤリヤ

・夫に先立たれた妻は、女手一つで息子と娘を育て、息子は嫁をもらい、娘を嫁がせた後失明する。

・嫁は義母を疎ましく思い、目が見えない義母に毎日同じ食事を与え、母親はそれがおいしいので満足しながら食べる。

・ある日、嫁ぎ先から娘が帰ってくるというので、母親はおいしいおかずをとっておき、

娘にそれを差し出す。

・それがミニスであることを初めて知らされ、母と娘は嫁の虐待ぶりに悲しむ。

・幾日か過ぎたある日、母は息子と嫁を呼び、「北の島に宝物を埋めてあるのでそれを

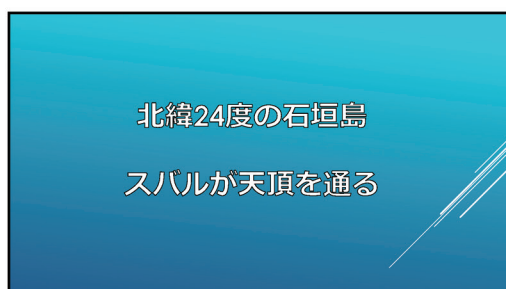
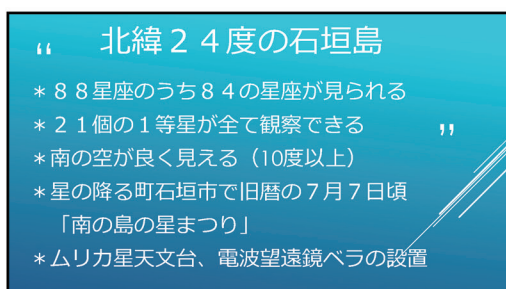
取りに行きなさい」と言う、欲張り息子夫婦は舟をこしらえて出かける

・母が用意しておいたクバの扇であおぐと天気は急変し暴風雨となり、夫婦は舟もろと

も波にもまれて死ぬ。

※話型「うどんとミミズ」をニンガチカジマーイの由来譚として語る

宮城幸子氏講演資料

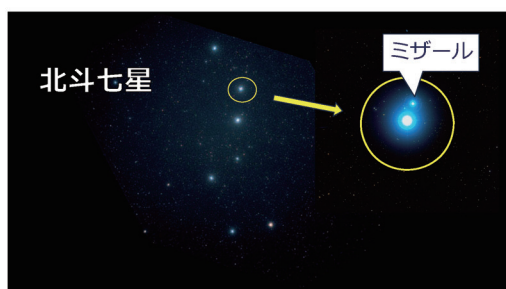


天の群り星や・・・

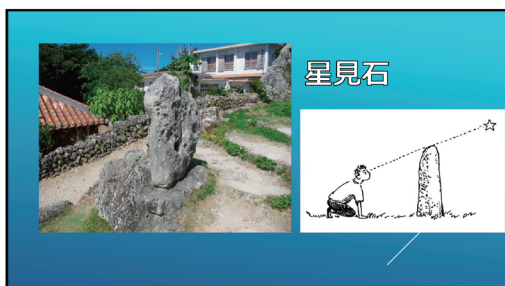
沖縄本島・・・数えきれないほどの星
八重山では・・・スバルのこと
「ムリカ星」、「むる星」とも言う

ムリカ星コンタ

南七つ星・・・南斗六星
北七つ星・・・北斗七星
ムリカ星・・・スバル



星見石
農耕の目印・手がかり



イールユドゥン・アールユドゥン
 (イール：西・入る) (アール：東・上がる)

ユドゥンとは、淀むこと
 では、何が淀むのか？
 ↓
 実は、スバルなのです。

子ぬ方星（北極星）について
 夜走らす舟や
 子ぬ方星見当てい
 我ん生ちえる親や
 我んどう見当てい



北緯45度の利尻島の北極星の高さ
 北緯24度の石垣島の北極星の高さ

月について

月の出入りで潮は満つ、
月の満時港に潮無し

♪月の位置で潮の干満を
♪山羊の出産と潮

月ぬ美しや十日三日
美童美しや十七つ
(ホーイチョーガー)

東から上りおーる大月ぬ夜
沖縄ん八重山ん
照らしょーり
(ホーイチョーガー)

あんだぎなーぬ月いぬ夜
我がだーけーら
遊びょーら
(ホーイチョーガー)

西から上りおーる若月けま
我ちゃ家ぬ頂までい
上り給ーり
(ホーイチョーガー)

風

① うらぶにユンタ

うら・・・蔵元　ふに・・・船
公用船出帆のための風を待つ唄。

② 風根が割れる

③ 午ぬ方干瀬ぬ鳴るか台風が近い

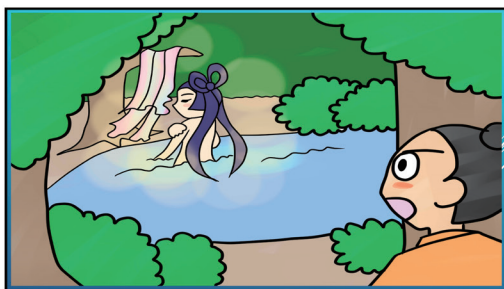
④ 二月風廻ーる

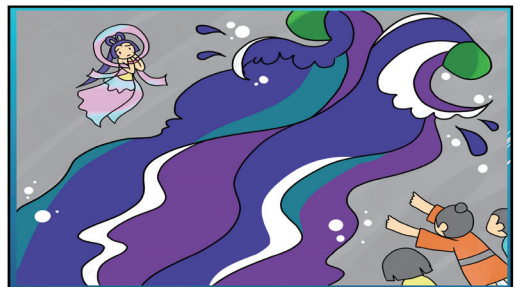
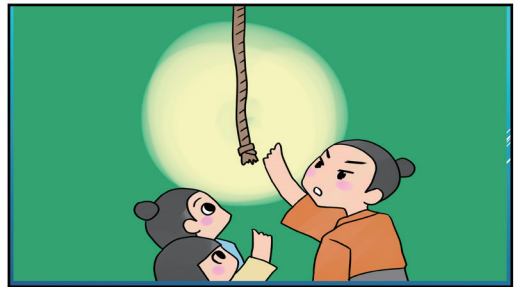
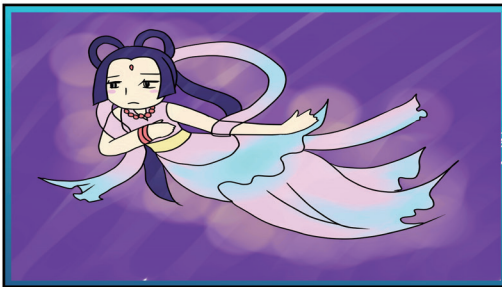
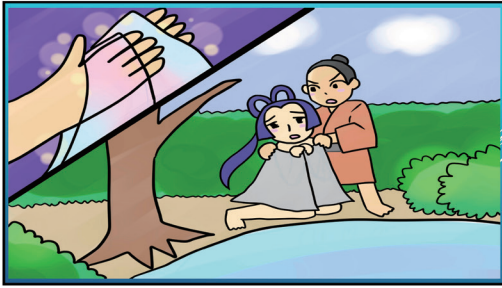
⑤ 口笛で風を呼ぶ

ペーラ



羽衣伝説
里之子と天女の恋物語



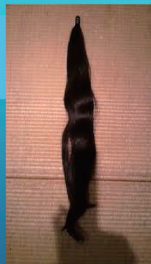




その他

1. イローラ星
2. シイカマ星（金星、宵の明星）
3. 南十字座

1. イローラ星



2. シイカマ星（金星、宵の明星）



3. 南十字座



終わりに

シキタボーティ ミーハイユー
ご清聴ありがとうございました
どうぞ石垣島へ

